

パネル・ディスカッション

Shakespeare—「遺産」から「資産」へ

講師： 藤本由香里（明治大学准教授）

吉原ゆかり（筑波大学准教授）

講師・司会：前沢浩子（獨協大学教授）

今回のパネル・ディスカッションの『「遺産」から「資産」へ』というタイトルは作業仮説だった。不特定多数の大衆とする廉価な娯楽として生み出されたシェイクスピアの戯曲が、英国のナショナリズム、ヨーロッパのロマンティズム、啓蒙主義、日本の近代化の歴史において高尚なる文化的「遺産」へと持ち上げられ、それが 21 世紀の今日文化相対主義とグローバル経済によってその高みから引きずり降ろされ、再び商品価値を持つ「資産」へと変貌しつつある一。

いったんはその仮説を出発点として議論を交わしてみると、「遺産」と「資産」という区分は二分法で対比すべき概念ではないことがよくわかってくる。歴史の中で遺産としての価値を獲得した文化アイコンであるからこそシェイクスピアは、新たな価値を生み出す資産として活用しうる。また消費対象として市場のリアルな原理を生き延びた結果としてシェイクスピアは歴史的な遺産になったともいえる。シェイクスピアの受容（需用）史において、遺産としての位置づけと資産としての価値は複雑な相互関係を編みあげてきた。

では今日、シェイクスピアをめぐるその資産と遺産の関係にはどのようなことが起きているのだろうか。今回のパネル・ディスカッションでは日本の少女漫画研究を専門とする藤本由香里氏と、アジアのポップ・カルチャーにおけるシェイクスピアを研究している吉原ゆかり氏に、まずはそれぞれのカルチャー・シーンでシェイクスピアがどのように「使いまわされているか」をレポートしてもらった。前沢はイギリスで文化の経済効果を積極的に活用しようとする政策について報告した。それらの多様な現象の交錯するところで下記のような興味深い問題点が浮かび上がってきた。

1. シェイクスピアの遺伝子組み換え

日本の少女漫画において、異性装のモチーフは、繰り返し使われ続けている。手塚治虫『リボンの騎士』や池田理代子の『ベルサイユのばら』は最もよく知られた例だ。顕著なのは 1970 年代以降、女子校の文化祭で、『桜の園』『嵐が丘』『マノンレスコー』といった世界の名作を女子高校生たちが上演するという設定だが、そのなかでも『ロミオとジュリエット』は圧倒的な頻度で使われている。女子高生同士がロマンティックで悲劇的な異性愛を演じるドラマのクライマックスは女の子同士のキス・シーンだ。唇がふれた瞬間にキヤーっという女の子たちの黄色い歓声があがる。このとき古い世代の怨念と因習にあらがう『ロミオとジュリエット』の若い恋と、制服と学則に縛られた女子高生たちの大人たち

への異議申し立てが重なりあう。共学の高校の場合もこれは同じで、日本の少女漫画において、『ロミオとジュリエット』は繰り返し、性別を逆転して演じられ、また、若者による大人たちへの異議申し立ての象徴として描かれてきた。〈性別越境〉とそして〈双子〉というモチーフ。この二つは、手塚治虫を通して日本の少女漫画の中に持ち込まれ、受け継がれていったシェイクスピアの遺伝子と言えるだろう。

『リチャード三世』『マクベス』に想を得た手塚治虫の『バンパイア』をはじめとし、シェイクスピアに題材を求めた日本の漫画は数限りない。キャラクター、設定、そして世界観が共通していれば、一見、大きく異なっている作品もアダプテーションと言えるだろう。そうした二次創作、三次創作の豊かさがシェイクスピアの影響の特徴であろう。シェイクスピアの遺伝子は表現形を変えて生き延びている。いわば遺伝子を次々と組み換えながら新たな作品が生み出され続けている。その豊かで複雑な可変性が、シェイクスピアと漫画の結びつきの面白さだ。

2. 新たなシェイクスピア・リテラシー

ポップ・カルチャーにおけるシェイクスピア遺伝子組み換えは、ネット・テクノロジーによって国境を越えて加速して広がっている。日本発のアニメ作品『ロミオ×ジュリエット』は、『ロミオとジュリエット』という世界的に認知度の高い作品名を意図的に利用することによってグローバルなマーケットでの成功を狙った。その思惑通り国内外で話題になった。

この作品のようにシェイクスピアがアニメ化や漫画化されると、またたくまに他言語の字幕や吹き出しがつけられ、ネット上にアップロードされる。さらにファンたちはその登場人物に扮してコスプレを楽しむ。アジアで、ヨーロッパで、アメリカで、若者たちがロミオやジュリエットのコスチュームで集っている。だがハムレットに扮した日本の少女が「『ハムレット』なんて読んだことがない」と言い放つように、原作へのこだわりは皆無だ。シェイクスピアの作品は知っている必要がない。だがそのパロディへの共通理解を持つという新たなリテラシーが生み出されている。

漫画的手法を取り入れた舞台でもシェイクスピアのパロディやパクリは変幻自在に繰り広げられている。そこに反映しているのは現代社会の風俗だ。性産業に組み込まれた新たなジェンダー位階制度や、“Emo”あるいは「中二病」とよばれる思春期の情緒不安などが、シェイクスピアをネタにした舞台やアニメで表現される。

シェイクスピアはゾンビのようにこうしたゲリラ的書き換えを生き延びている。どのようにパロディにされようと、いやむしろパロディにされることによって、シェイクスピアという文化的アイコンの権威は強化されている。ポップ・カルチャーがアナーキーにシェイクスピアを活用するほどに、シェイクスピアという名前には純化された文学的権威が付与される。

3. グローバル時代の文化的ナショナリズム

シェイクスピアの戯曲は読んだことがなくても、シェイクスピアの生家はぜひとも訪ねたいと思っているのが日本人観光客だと、イギリス観光局のマーケティング担当者は分析している。観光やメディアを含む、いわゆる創造的産業(creative industry)を国家経済の重要な基盤ととらえているイギリス政府は、シェイクスピアからロイヤル・ファミリーまで、様々な文化遺産を収益性の高いビジネスにつなげようとしている。グローバル化した大衆消費社会において、テキストにはアクセスできなくても文化記号としてのシェイクスピアは誰にでもわかりやすい商品になりうる。

「アームズ・レングス」という原則のもと、アーツ・カウンシルという特殊法人を介し、芸術諸部門との間に間接的な一定の距離を保とうとしてきたイギリスの文化政策は、グローバル経済に適応するため転換せざるを得なかった。文化は雇用創出と外貨獲得のために重要な成長産業部門としてとらえ直され、政府もアーツ・カウンシルも劇場などの文化セクター関係者も、いっせいに文化の「価値」を「経済的価値」と同義ととらえるようになった。だがしかし、誰にでもアクセス可能なすぐれた文化を創出するという、一見、民主的な主張は、アドルノとホルクハイマーの文化産業批判と照らし合わせて分析するべきであろう。商品化は文化の批判機能を喪失させ政治的全体主義につながると二人は警鐘を発していた。わかりやすい記号になった文化アイコンはわかりやすいナショナリズムと容易に結びつく。

イギリスのソフト・パワー増強のため活用される文化アイコンは、グローバルな文化市場用に標準化されたイギリス文化だ。単純さに還元する強力な磁場が働く大衆文化というマーケットの中で、複雑な言語の集積であるシェイクスピアのテキストの持つ批判機能、画一化されない個別性が、どう生き延びていくかに、今こそ注目すべきであろう。

今回のパネル・ディスカッションで出た様々な話題を、やや無理やり整理すれば上記のようなポイントにまとめられるだろう。だがここからはみ出すいくつもの興味深い事例や視点についても言及された。今回のパネルで私たち 3 人の講師が意図したのは、目下起きていることのダイナミズムをとらえたいということだった。近代初期のイングランドの大衆文化の中に生まれたシェイクスピア作品が、ポスト・モダンと呼ばれる今日、やはり大衆文化の中でたえまなく変容し続けている。その動的な現象の面白さと問題点を、これからもそれぞれの視点で観察し続けていきたいと思っている。(文責：前沢浩子)